

# なおす・なおる

田中三保子



人が人をなおすということはどういうことだろうか。保育の現場から考えてみようと思う。

なおす、というときには、すでにそのむこうに、あるべき姿や望ましい姿が想定されているように思われる。それを欠いていたり、そこから逸脱しているようなばあいには、あるべき方向へ導くことを、なおすというのであるのか。

私が、日ごろ保育の中でなおしたいと思うのはどんなときか、改めて考えてみると、子どもが、ハサ

ミを持ったまま歩いたり、食事中頬ばったまましゃべったりしているときなどのようである。それらはい、日常の生活習慣であって、今まで知らなかったことを教えたり気づかせたりすれば、比較的直りやすい。望ましいと思われる状態がはっきりしていて、直すことが子どもの中の心の中にまで響かない事柄だからであろうか。私の方でも心安く働きかけることができる。

外からは同じようにみえることであっても、その

行為が子どもの心の内奥にかかわっていると感じられるときには、直すことは容易ではなくなる。なぜそうするのか、そうせざるを得ないのか、子どもの気持ちになって考えてみても、なかなか答えはみつからない。心の中から何かに突きあげられてそうするのであって、子ども自身にも理由は分からないにちがいない。

実例をあげてみる。K子はハサミをしょっちゅう持って歩く。またクラスのハサミを自分の引出しにしまいこむ。危ないからハサミを持って歩かないように、みんなのものだから一人じめしないように、という指導だけではK子の行動は変わっていかない。K子はハサミに執着しているのである。ひとつの行為だけにこだわることなく、行動全体からK子の本当の気持ちを推しはかり、それを受けとめていくことが大切なのではないか。集団の中では、どんな行為でも全て認めるといふわけにはいかないけれども、行為の奥にあるK子の気持ちはそのままに受

け入れ、応えてあげたいと思う。ハサミにこだわらなくなることだけをめざすのではなく、K子がK子らしく生きられるように、気持ちについていきながら、共に探っていききたい。

三歳の二学期。K子は今でもときおり、刃先を手のひらに握ってではあるけれど、ハサミを持ち歩く。多分この先も、私はK子の気持ちに添いながら対応を工夫していくことになるのであろう。

かつて私は臨床心理学を志したことがある。大学の心理相談室で幼児のプレイセラピイを担当することになった。ことばがでない、友だちと遊べないということで母親に連れられてくる子どもたちは、おもちゃがたくさんあるプレイルームにはいってもほとんど動きだせず、じっとしたままのことが多かった。仕方なく、私も黙って傍らにしゃがみこむ。この子がどうしてしゃべれないのか、どうして遊べないのかは、二人きりのこの場からはわかりようもなかった。けれども一緒にじっとしていると、その子

の細かな気持ちの変化が伝わってくるような気がした。区切られた一時間の中で、わずかながらも子どもの気持ちは揺れ動く。それをそのままに受けとめ、つきあっていく。私がついていくのがわかると、子どもの心の揺れはだんだん大きくなっていくようであった。

何回か回を重ねるうち、子どもたちはたいい自分から動きだすようになる。おもちゃや私に対してはつきりと反応するようになり、心の中で何かが大きく動きだすのが伝わってくるようになる。そうして、私と二人だけの世界では相変わらずことばは発しないけれど、友だちと遊べるようになったかどうかはわからないけれど、その子が自分から動いたり、働きかけたりできるようになってきたことが、はつきりと感じられるようになってくる。「治った」として治療が打ちきられるのはこの頃である。

子どもたちは自分たちの力で治っていった。私にできたのは、ただ子どもたちについていくことだけ

であった。

改めて振り返ってみると、保育者となった今も、「治療」と「教育」と、その目的は変わっても、私の子どもたちとかかわる基本的な姿勢はほとんど変わっていないように思う。

子どもは自分自身の内に力を秘めているといつも思う。自分を見守り支えてくれる人がいれば、いつか必ずその力を発揮し、自身の危機を乗り越えることができる。自分自身の力を使って「なおす」ことができるのではないか。時を経て、それまでを振り返り、子どもの行動が変容していると考えられるときに、外側からその子を表現して「なおった」というのだと思う。保育者として、子どもについていうと一所懸命になっているときには、子どもはもちろん、保育者自身にもそれと自覚されていないのではあるまいか。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)